

危機への対応手段としての「アラキ」

―北東北各地における第二次世界大戦前後の事例から―

辻本 侑生

はじめに

本稿は、北東北において焼畑を意味する民俗語彙である「アラキ」（アラギ・アラグ等とも呼ばれる）に着目し、先行研究と筆者の調査データ等突き合わせ、若干の新視点の提示を試みるものである。

近年、地域資源活用やカーボンニュートラルの観点から、日本国内の焼畑について社会的関心が高まり、研究も増加している。^① こうした中で北東北は、例えば佐々木高明氏が、焼畑に関する最後の全国統計である一九五〇年世界農業センサスの分析に基づき「青森県の大部分が焼畑空白地帯になっている」と指摘しているように、焼畑研究の文脈では、九州・四国・中部地方などに比べて、相対的に着目されてこなかった地域である。

しかしながら、青森県を含む北東北の焼畑については、民俗学・人文地理学・生態人類学等によって研究が蓄積されてきた。一九三〇～四〇年代には山口弥一郎氏が北東北の広範囲での踏査をもとに「アラキ」という名称の焼畑が広く分布していることを報告し、かつ「アラキ」がも

ともとは開墾を意味する語彙であり、その後焼畑という意味が付加された可能性を示唆している。^③ 一九六〇年代には、佐々木高明氏が統計資料と全国アンケート調査の分析、および青森県田子町での現地調査をもとに、北上山地を中心に分布する「春播きの大豆・アワを主作物とする耕作期間の長い特殊な焼畑輪作形態」である「アラキ型焼畑」という類型を設定している。^④ また、野本寛一氏は「北の焼畑」に関する研究の一環として、青森県南部町（旧名川町）や岩手県久慈市（旧山形村）の焼畑について詳細に調査し、雑穀を中心とし、鋤を活用する耕作形態について民俗誌的に記述している。^⑤

そして一九八〇年代中頃より、岡恵介氏が岩手県岩泉町における長期の生態人類学的調査と北東北各地での聞き書きに基づく研究成果を継続的に発表し、佐々木氏が提唱した「アラキ型焼畑」の中に、同じく佐々木氏が設定する「カノ型焼畑」に近い焼畑も含まれることや、北東北の焼畑が商品作物栽培をも取り込み、地域によって多様な輪作形態のヴァリエーションが展開していること等を明らかにしている。^⑥

以上の先行研究からは、「アラキ型焼畑」と概括されてきた北東北の

焼畑について、商品作物栽培を取り入れつつ雑穀作を主とすることや、鋤等による耕起を伴うことなど、興味深い特色が浮かび上がっている。

筆者は、先述したような先行研究の成果に導かれつつ、北東北での資料調査やフィールドワークを行い、「アラキ型焼畑」の類型名のもととなった「アラキ」という民俗語彙が、狭義の焼畑にとどまらない意味を持つ可能性に着目するようになった。そして、とりわけ第二次世界大戦前後という「危機」の時代に、「アラキ」の特性が表出しているのではないかと考えるようになった。こうした問題意識をもとに、本稿は、あえて特定のフィールドに焦点化せず、先行研究によるデータや新聞記事等の文献、そして筆者のフィールドワークによって得た資料をつなぎ合わせるにより、北東北の「アラキ」という民俗語彙が有する多様性を、特に第二次世界大戦前後という時期に焦点化して浮き彫りにすることを試みる。

一 食料増産とアラキ

一九三六年、秋田県鹿角出身の民俗学者・内田武志氏は鹿角において使われている様々な民俗語彙を整理した『鹿角方言集』をまとめた。この書物の「アラギ」の項目をみると、「アラギは山の荒蕪地を新たに開墾した畑地。焼畑」、「アラギ・オゴス 荒地を畑にするを謂ふ」とあり、冒頭で言及した山口氏の見解と同じく、アラギが開墾と焼畑の二重の意味を有していることが示唆される。

『鹿角方言集』出版の五年後、鹿角のアラギは思わぬ観点から着目さ

れることになる。戦争前夜の食料危機である。例えば一九四一年九月二六日の秋田魁新報には、以下のような記事が掲載された。

【資料一】

宮川村の焼畑 活用 四十町歩に植林伐採の模範

鹿角郡宮川村の「焼畑」四十町歩が各方面の注目する処となり、

さきに小林農林省技師が調査、県試験場平田技師も実地を詳細調査するところあった。宮川では昔から樹木を伐採した跡はそのまま植林せず「荒起」と称してこれを開墾、大豆、青刈大豆、粟の類を栽培してゐる。樹木を伐つてからは一年または二年これらのものを栽培する畑を「焼畑」と称している訳だが、一年または二年焼畑にしてこれから杉を植えると杉の生育良く雑草も生えず植林として申分ない。焼畑時代は耕起するだけで肥料は要せず植林後も間作してをり時局柄寸土活用の模範となつてゐるが、この焼畑が全村に四十町歩あり次ぎ次ぎと植林伐採が行われてゐる^⑧

資料一によれば、宮川村（現鹿角市）の焼畑が植林と食料増産を両立する効果的な農法であるとして、農林省から技師が調査に来たと報道されている。

また、一九四三年七月六日の「秋田魁新報」にも、「造林と増産の交流 特殊存在鹿角の焼畑」という記事タイトルで、以下のような内容が掲載されている。

【資料二】

先祖伝来の自然農耕方法を執つてゐる焼畑が八幡平とともに鹿角

郡宮川村の名物だ。樹木も早く成育し大豆、小豆、ソバ、馬鈴薯、

青刈大豆の類も収穫する。この農耕こそは戦争を解決する食糧増産にもって来いだ。農林省も県農会も宮川村の焼畑に注目しそれぞれの係員が出張して詳細な調査をしてゐる。(中略)春早く視察に来村した農林省の係員は洵に稀な珍しい標本をみるようだと同村長谷川国民学校裏手の焼畑を視て激讚したものだ。(中略)郡農会では、焼畑を視察に来る人々が多くて案内にも困る程だが最も古い耕作方法でその原始耕作が最も効果多い事を見て山林と農作に関心を深めて帰る事は悦ばしい、宮川村の名物である。これを全国的にしたいと思つてゐる⁹⁾

これは資料一から二年後の記事であるが、引き続き宮川村における焼畑が先進事例として、多くの視察を受け入れるなど、注目を集めていることが記されている。

では、この時着目された鹿角のアラギとはどのようなものだったのか。筆者が秋田県鹿角市小豆沢を訪れて聞き書きしてみると、資料三の通り、小規模な雑穀を作る焼畑のことも、戦後の食料危機で大規模に開墾してジャガイモを作った焼畑の、いずれのことも「アラギ」と称していた。

【資料三】

アラギは、普通は個人所有の山で行い、一か所五―六反歩程度である。草木を伐採した後、野焼きし、大豆、小豆、粟、蕎麦、カボチャ、赤カブ、白カブなどを育てる。ただし、一九四六年に村の神社が火事になった際、再建資金繰りのため三〇町歩ほどの杉林を伐採し、食糧難の時代であったため、そこでアラギをやつて馬鈴薯を

栽培した。このときの火入れ作業は大人たちが担ったが、子どもたちも人糞桶を担いで、馬鈴薯の植え付けや施肥を手伝った。¹⁰⁾

この資料三においては、火入れを伴う小規模な焼畑と、食料危機の際に大規模に行う焼畑の、どちらをも「アラギ」という語彙で表現していることが窺える。なお、小豆沢を含む八幡平地区における民俗調査報告書においては、「食糧難の時期には、せまい原野やあれ地をもアラギにした¹¹⁾」と記されており、食料危機の際のアラギはより小規模な土地でも行われていたこともわかる。

戦時中における事例は、岩手県の三陸沿岸南部、大船渡市三陸町綾里でも聞かれた。綾里は定置網漁やホタテ養殖など漁業で栄えてきた地域であるが、海岸にすぐ山が迫るリアス地形の特性上、林業など山の生業も盛んであり、焼畑も昭和戦前期ごろまで営まれていた。綾里村の焼畑は「アラグ」と呼ばれ、地元郷土雑誌「三陸のむかしがたり」七号(一九八七年)に掲載された綾里の住民・木下庄吉氏の回想によれば次のようなものであった。

【資料四】

昔は食糧は粗食で主に大麦、小麦、稗、粟、大豆等を常食として米はほんの稀に食し、主に雑穀を田畑で収穫したのです。それでも畑の沢山ある家庭では焼畑を耕作する事はないのですが、畑の不足な家庭では焼畑作りに懸命でした。公有林を伐採すると競つて伐採趾を整地して穀物の種を播種して食糧の増産に務めたのです。この焼畑作りは、畑耕作と比べ非常に苦勞が多く、耕作に通うのも遠い山路が多く、秋の取り入れには重い穀物を肩に背負つて運ばなければ

ばなりません。整地は木の根があるので、根を掘り起し作業は大変な重労働で、それでも食糧獲得のために未明に起きてせつせと遠い山路を通うのでした。焼畑作りは主婦が主体で働くのですから、女子の仕事には過分の重労働で、主人は海での労働、主婦は焼畑作りの仕事と非文化時代の生活は並大抵のことではなかったのです。焼畑作りは当時の呼名を（アラグマキ）と語り、整地には必ず害虫駆除のため地面を焼くのでアラグ焼作業といい、火災を注意して無風状態の日を選び入念に働いたのです¹²。

第二次世界大戦に綾里村から出征した兵士に向けて、村のニュースを伝えていた『銃後だより』という資料が残されている。この銃後だよりの中にも、アラグに関する記載がみられる。例えば三六号（一九四一年三月二五日発行）には資料五のように「アラグの利用」といった記述がみられ、太平洋戦争が始まる前から、アラグを利用した食料増産が計画されていたことが伺える。

【資料五】

（昭和一六年）三月十日 大政翼賛会綾里支部の発会式を役場楼止に於いて六十余名参列のもとに午後一時開催。『我等は私を捨て大政翼賛に貢献する』意を決議。厳肅裡に午後二時閉会。引続き村常会開催。食糧増産退職金献納茶殻集収運動実施につき協議。食糧増産は各種団体の力で荒地の開墾、アラグの利用、茶殻は小学児童には毎日各家庭より集収する。退職金は各部落班長は集める¹³。

このほか、六五号（一九四三年四月二五日）の「青年団便り」の箇所には「銃後ノ増産戦ノ季節トナツタノデ待ツテキタトバカリニ各分団単

位ニテ（アラグ）及荒地ヲ耕シ馬鈴薯ノ播種スベク大根及稗トヲ準備中¹⁴」という記述があり、戦時中の綾里において、青年団によって集団的に焼畑が行われていたことが窺える。

二 開拓とアラキ

既に述べている通り、アラキが焼畑という農法ではなく、開拓することや、開拓地そのものを指す語彙である場合もある。例えば、岩手県の気仙川沿いに位置する中山間地域、陸前高田市横田町舞出では、戦後の食料不足の時期に戦後開拓が行なわれたが、この戦後開拓のことを舞出では現在でも「アラグ」と称している¹⁵。

こうした焼畑と開拓・開墾の意味が入り混じる事例は、青森県南部地域においてもみられる。例えば八戸市南郷の島守地区では、集落によって焼畑が「カイコン」と呼ばれる場合と「アラギオコシ」（もしくはアラジオコシ）と呼ばれる場合があることが報告されている¹⁶。八戸市根岸地区においても焼畑を「アラギオコシ」と言い、「二年ぐらいは、肥料の要らない大豆を植え、その後は普通の畑として使用した¹⁷」というように、焼畑を行った後、常畑に転換する事例が報告されている。

焼畑・開拓・開墾をめぐって錯綜する語彙を理解する上で補助線となるのが、館花久二男氏による研究である。館花氏は聞き取り調査に基づき、八戸市美保野・花生や階上町東平において、昭和二〇年代の緊急開拓事業における開拓を指す語彙として「アラキ」が使われたことを明らかにしている¹⁸。そして館花氏は、青森県南部地域における「アラキ」と

いう語彙が、①焼畑（一時的な畑作）、②常畑を作るための開墾、③集団入植による開墾（戦後の緊急開拓）、という三つの意味を有していることを指摘しており、本稿の問題意識からすると非常に興味深い。

ただし、この館花氏の整理にある①②③の意味は、現実には複雑に入り交じり、かつ時代によっても変化しうるものであった可能性がある。この論点について、試みに青森県西目屋村大秋の事例から考えてみたい。西目屋村は、弘前市に隣接しつつも、山林に囲まれた奥まった山村である。この西目屋村の大秋集落は、近世期には凶作に襲われて多数の死者に見舞われた地域であった。山口氏は、一九四〇年代に西目屋村大秋で凶作と焼畑に関する現地調査を行い、水田開発が進んで焼畑が衰退しつつも、未だ存続していると述べている。¹⁹山口氏は、大秋のアラキについて次のように述べている。

【資料六】

この村の山野を開墾することをアラキオコシという。古語とも覚しい焼蒔の語が用いられている所をみると、古くより行なわれていたのは勿論で、春の四月下旬頃山野を切り払って、二十日位過ぎて焼払い、第一年目は粟、黍、二年目春馬鈴薯、その跡に蕎麦、三年目小豆或は大豆等を作付する。作物の生育がよければ七八年も無肥料で作る所があり、その後は約二十年間もソラス、即ち荒して休閑する意である。植林は特にしていないが、その人一代では再び起すようなことはないといわれている。もとは国有山野にも自由にアラキを起こしたものであるというが、三十年程前より官地を無断アラキを起すことが厳しく禁じられ、現在は部落より一里乃至一里半も

離れた共有原野を起している。²⁰

凶作に度々襲われてきた西目屋村大秋において、アラキによる開墾はある種のセーフティネットであったと考えられ、山口氏が調査に訪れた一九四〇年代も、衰退しながらも火入れを伴うアラキがみられていた。しかし、二〇二二年五月に筆者が西目屋村大秋で実施した聞き取りによれば、西目屋村大秋におけるアラキとは、昭和二〇年代前半において、以下のようなものであったという。

【資料七】

アラキオコシは原野を起こすことである。昭和二〇年代前半ごろまでは、スイカやマクワウリをアラキでつくっていた。アラキでは火は入れなかった。スイカは苗が普及する前、種まきで栽培していたときは連作障害が起こりやすかったので、一回も畑にしない場所か、何年前かに栽培して放置した場所で栽培していた。火を入れないので、丁寧に耕し、雑草も抜いた。火を入れない理由としては、火入れしないほうが、草木が発酵して養分になると言っている人もいる。市販の苗を使うようになってからは、連作障害が少なくなつたため、アラキオコシで栽培しなくなった。²¹

資料七をみると、昭和二〇年代前半、すなわち終戦直後の西目屋村大秋において、「アラキ」は火入れをせず、連作障害を避けるために輪作してスイカ等を栽培することを指していたのである。

以上を踏まえると、西目屋村大秋における「アラキ」は、凶作という危機に立ち向かうための開墾から、戦前には火入れを伴って雑穀や馬鈴薯を栽培する焼畑、そして終戦直後には火入れを伴わずスイカ等を栽培

する、菜園に近い性格の一時的な畑へと変化していったと推察される。館花氏の報告にある南部地域の「アラキ」が第二次世界大戦後に緊急開拓の意味を有していたのに対し、西目屋村ではその同じ時期に菜園に近い性格を有していたことは興味深い対照であり、今後地域性も考慮に入れつつ、差異が生じた要因を考察する必要があるだろう。

まとめと今後の課題

以上、本稿では文献および現地調査から、青森県・秋田県・岩手県各地における「アラキ」の事例を、第二次世界大戦前後の時代に焦点化しながら概観してきた。言及した事例からは、「アラキ」という民俗語彙が「焼畑」という農法の一つの分類である以上に、慣行的な焼畑による作物栽培から、戦争による食料危機や戦後開拓といったイレギュラーな事態への対処をも幅広く含む語彙であることが看取された。例えば佐々木高明氏が「一時的な開拓地型の焼畑は、本来の焼畑とは性格を異にするものであり、当然区別して考察されるべき」と指摘しているとおり、食料危機の時期の焼畑や開拓目的の焼畑は、循環的な輪作によらない例外的なものとして、これまでの焼畑研究において積極的に検討されてこなかった。しかし、北東北各地において用いられている「アラキ」という民俗語彙に着目すれば、先行研究が「焼畑」として捉えてきた輪作型の焼畑も、食料危機対応や開拓目的の焼畑も、フィールドの視点から見れば同じ「アラキ」であり、連続したものとして捉えられていると考えることができらるだろう。

岡恵介氏は岩手県北部から青森県で「アラキ型焼畑」を調査し、「この地域の焼畑がバラエティの幅を持っており、地域的な農耕技術や市場経済の影響を受けて、それぞれ変化してきた可能性²⁴⁾」を指摘している。筆者は、この指摘に賛同するとともに、アラキが狭義の火入れを伴う焼畑以外に、北東北での地域の危機対応に関する、より幅広い意味合いを持つ重要な語彙である可能性を指摘したい。

ただし、注意しておきたいのは、本稿の結論は、焼畑が今後の未来に発生しうる食料危機の際に、役立つかもしれない方法である、という単純な知見を意味しないということである。筆者が既に別稿にて明らかにした通り、第二次世界大戦末期には国策として焼畑が奨励され、当時岩手県で高等女学校の教頭職にあった山口弥一郎は、教員かつ焼畑の専門家の立場として、学生たちを指導して焼畑による食料増産を試みたが、結果は全く作物が収穫できない大失敗に終わっている²⁵⁾。本稿が強調するのは、過去の「危機対応」を単純に称揚することではなく、「アラキ」という民俗語彙一つに着目しても複雑に現出する「危機のフォークロア²⁶⁾」をより精緻に捉えていく調査研究の必要性である。

なお、西目屋村大秋の事例からは、「アラキ」といったときには、火入れをする場合もあれば、しない場合もあることがうかがえた。このことは、火入れに対する権力の介在の可能性も示唆される。例えば、青森県史叢書『岩木川流域の民俗』によれば、青森県大鰐町居士では「山に新たに畑地を開くことをアラギといった。山を焼くことはご法度で、焼畑をしたことはないという²⁷⁾」という記述がある。このほか、宮本常一氏が一九六三年に下北郡川内町畑（現むつ市）で行った調査のノートには

「焼畑は、明治四二年のときは書き物を持って出るといふ通達があつた⁽²⁸⁾」
 という記載がみられ、下北においても行政による焼畑の把握が試みられた可能性がある。こうした事例は、冒頭に述べたように、統計上、青森県があたかも焼畑の空白地帯であるかのように見えることも関連する可能性がある。行政権力による火入れ規制が見られる一方、秋田県鹿角市（旧宮川村）の事例のように戦時中は国による焼畑再評価が行われるなど、焼畑を巡る政策のアンバランスは、北東北のフィールドにおいて検討すべき重要な論点であると考えられる。⁽²⁹⁾ 今後継続的に検討していきたい。

また、今回は論点化することができなかつたが、北東北の焼畑は道具を使う点が特徴的であり、例えば青森県田子町における「昭和三六年頃までは六月頃に集落内でアラキオコシという焼畑が行われていた。木綿などの布で作った縄に一定の間隔でマツチ棒を取り付けて火を点け、じわりじわりと少しずつ焼いていった⁽³⁰⁾」といった事例からは、多様な道具が焼畑と結びついていることが示唆される。こうした、焼畑と道具との結びつきについては、今後の課題としたい。

註

- (1) 鈴木玲治・大石高典・増田和也・辻本侑生編『焼畑が地域を豊かにする 火入れからはじめる地域づくり』（実生社、二〇二二年）、池谷和信・米家泰作・佐藤廉也「新たな焼畑像を探る 佐々木高明の研究を超えて」『季刊民族学』一八一、二〇二二年）など。
- (2) 佐々木高明『日本の焼畑』（古今書院、一九七二年）二七頁。なお、佐々

木氏の研究を踏まえつつ、焼畑面積が小規模な市町村も含めて一九五〇年世界農業センサスによる焼畑分布図を再作成した米家泰作氏による図を見て、やはり青森県は「焼畑空白地帯」となっている（米家泰作「焼畑から見た日本」『月刊みんぱく』四六一二、二〇二二年）。

- (3) 山口弥一郎『東北の焼畑慣行』（恒春閣書房、一九四四年）四五～九二頁、および一六五～一七〇頁。

- (4) 佐々木高明『日本の焼畑』（古今書院、一九七二年）一二八頁。

- (5) 野本寛一『焼畑民俗文化論』（雄山閣、一九八四年）六〇三～六〇八頁。

- (6) 岡恵介「北上山地中北部の焼畑経営の変化の諸相 アラキ型・カノ型 漸移帯からアラキ型地帯へ」（『アレン短期大学紀要』七、一九九〇年）、

岡恵介「アラキ型」焼畑の多様性の意味」（篠原徹編『民俗の技術』、朝倉書店、一九九八年）、岡恵介「増補改訂版 山棲みの生き方 木の 実食・焼畑・狩猟獣・レジリエンス」（七月社、二〇二二年）。

- (7) 内田武志『鹿角方言集』（刀江書院、一九三六年）一〇頁。

- (8) 『秋田魁新報』（一九四一年九月二六日）。

- (9) 『秋田魁新報』（一九四三年七月六日）。

- (10) 秋田県鹿角市小豆沢・安保源悦氏（一九三二年生まれ）より、二〇二二年六月二十一日聞き取り。

- (11) 鹿角市市史編さん室『八幡平の民俗（鹿角市市史民俗調査報告書第一集）』（鹿角市、一九九〇年）五八～五九頁（阿部繁治氏執筆部分）。

- (12) 木下庄吉「焼畑作り」（『三陸のむかしがたり』七、一九八七年）五一～五二頁。

- (13) 綾里村銃後通信連絡部報記念出版会『綾里村銃後だより』（一九八五年）。

- (14) 綾里村銃後通信連絡部報記念出版会『綾里村銃後だより』（一九八五年）。この資料の引用部分については、辻本侑生「思いがけない「焼畑」

との出会い」(『まほら』三八、二〇一七年)で萌芽的に言及した。

- (15) 辻本侑生「横田地区と「津波」・「山津波」」(中野泰編『川と海の民俗誌 陸前高田市横田・小友地区民俗調査報告書 気仙地域の歴史・考古・民俗学的総合研究・民俗学部門報告書』(科研費基盤研究B報告書、二〇一七年))。
- (16) 中央大学民俗研究会『昭和五四年度調査報告書「常民」第一七号 青森県三戸郡南郷村島守地区調査報告書』(一九八〇年) 四七～四八頁。
- (17) 八戸市史編纂室『民俗調査報告書 根岸地区の民俗 平成一二年度民俗聞き取り調査より』(八戸市、二〇〇四年) 一九頁(古里淳氏執筆部分)。
- (18) 館花久二男『近代八戸地方の農村生活』(八戸市、二〇〇四年) 五五～五六頁。
- (19) 館花久二男『近代八戸地方の農村生活』(八戸市、二〇〇四年) 六九頁。
- (20) 山口弥一郎『東北の焼畑慣行』(恒春閣書房、一九四四年) 四七頁。
- (21) 山口弥一郎『天明度に於ける津軽大秋の死絶と再興』(『社会経済史学』一九一四・五、一九五三年) 八五～八六頁。この資料六の引用文中に出現する「焼蒔(やきまき)」は、山口氏が一九四〇年代当時に西目屋村大秋の古老から「焼畑」を意味する語彙として聞き取ったものであり、山口氏はこの「焼蒔」を「アラキ」よりも古い、焼畑を意味する語彙であると推測している(山口弥一郎『東北の焼畑慣行』(恒春閣書房、一九四四年) 四七～四八頁、一七〇頁)。
- (22) 青森県西目屋村大秋・三上紘一氏(一九四〇年生まれ)より、二〇二二年五月三〇日聞き取り。
- (23) 佐々木高明『日本の焼畑』(古今書院、一九七二年) 二〇頁。
- (24) 岡恵介「アラキ型」焼畑の多様性の意味」(篠原徹編『民俗の技術』朝倉書店、一九九八年) 七〇頁。
- (25) 内山大介・辻本侑生「山口弥一郎のみた東北 津波研究から危機の

フィールド学へ』(文化書房博文社、二〇二二年)。

- (26) 「危機のフォークロア」の表現は、山田巖子氏による(山田巖子「巫女と戦争 東北における危機のフォークロア」『国文学・解釈と鑑賞』七三―八、二〇〇八年)。また、本稿に関連する「危機のフォークロア」の視点からの研究として、佐藤梨恵「非常時」への対応 岩手県八幡平市安代地区における食生活」(『東北民俗』四二、二〇〇八年)、佐藤梨恵「食いつなぐ」ための仕組み 岩手県八幡平市安代地区の事例から」(『青森県の民俗』八、二〇〇八年)、などがある。
 - (27) 青森県環境生活部県民生活文化課県史編さんグループ『岩木川流域の民俗』(青森県、二〇〇八年) 三二頁(成田敏氏・村上直人氏執筆部分)。
 - (28) 宮本常一(宮本千晴監修・校閲、田村善次郎・徳毛敦洋編)『宮本常一農漁村探訪録二三下北半島調査ノート(二)』(宮本常一記念館、二〇二二年) 一九頁。
 - (29) このことと、現在の青森県における「わら焼き」(水田における稲刈り後の火入れ)への規制との間に関連性があるかは、今後検討すべき課題であると考えている。
 - (30) 弘前大学人文社会科学部民俗学研究室『田子の民俗 青森県三戸郡田子町』(二〇一八年) 三六頁(加茂通典氏執筆部分)。
- 【付記】本稿は、第七十四回日本民俗学会年会(二〇二二年一〇月二日、於熊本大学)で口頭発表した内容を加筆修正したものである。本稿は、JSPSS 科研費JP222K20070「地域社会の「危機」を捉える民俗学的視座の構築に向けた基礎的研究」(研究代表者・辻本侑生)の助成を受けたものです。

【謝辞】西目屋村での調査にあたっては三上紘一氏、三上学氏（西目屋村教育委員会）、鹿角市での調査にあたっては安保源悦氏、佐藤寛氏（鹿角市役所）、田中康明氏（鹿角市集落支援員）、梶本歩美先生（国際教養大学）に大変お世話になりました。記して心より御礼申し上げます。

（つじもと・ゆうき 弘前大学地域創生本部助教）